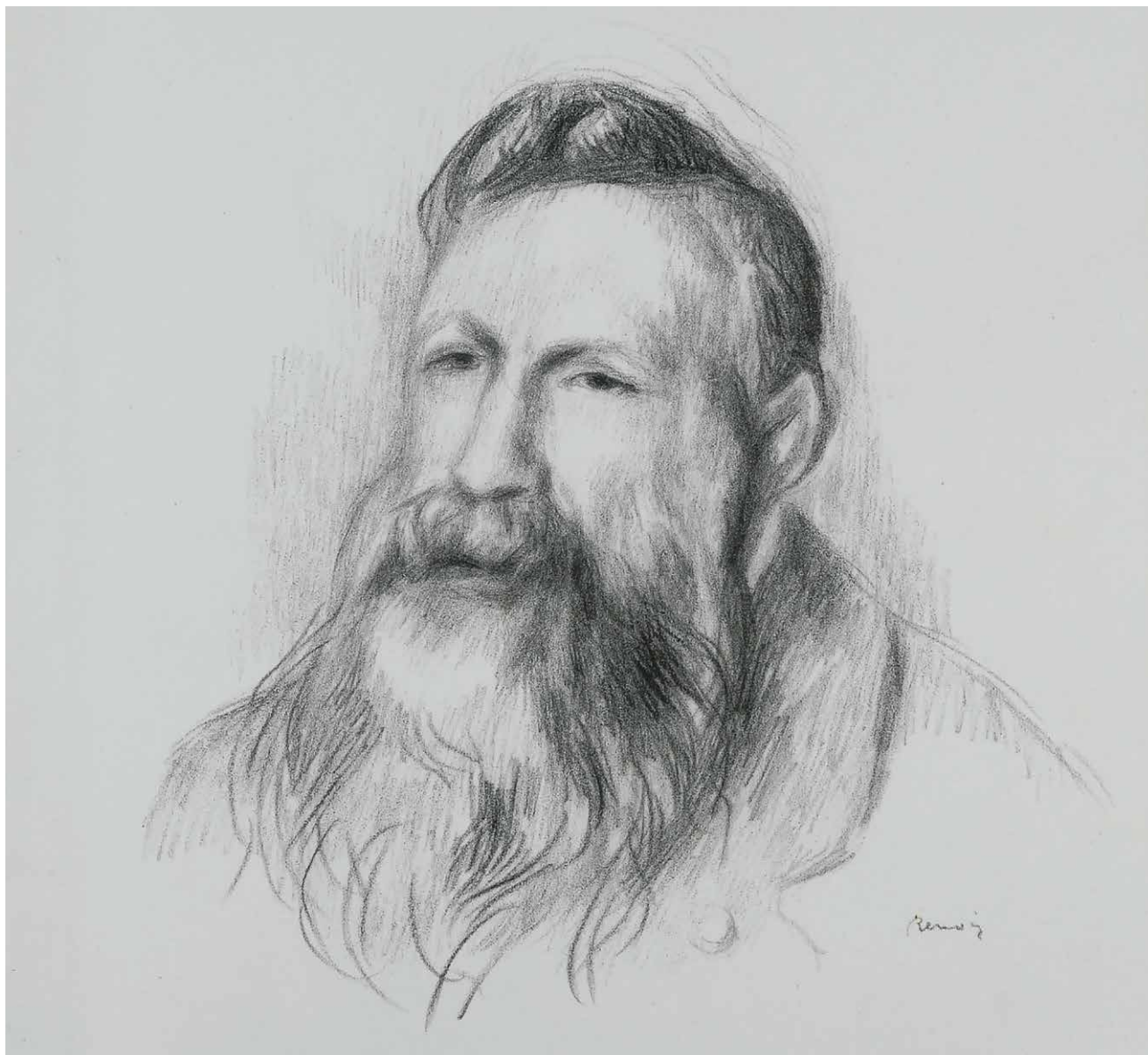


アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



ビエール・オーギュスト・ルノワール
《オーギュスト・ロダンの肖像》
一九一四年頃 リトグラフ、紙
六四・三×四八・五cm
小山田佳穂氏寄贈

華やかな裸婦の絵画で知られるルノワールによる、ロダン晩年の肖像画。生没年がほぼ同じ二人の芸術家の交流がいつ始まったのかは不明だが、一八八七年に同じ展覧会に出品しており、共通の知人も多かった。本作（版画）のほか、ルノワールはデッサンでもロダンの肖像を二点制作した。このうち、彫刻家の顔をやや左斜めから捉えた一点は、版画の方がより簡潔な線で表現されているもの、本作と類似している。《一九一四年のロダン》という名がついたもう一点は、この年に南仏のルノワールの別荘を訪れたロダンをほんのわずかな時間で描き、翌年に出版された『ロダン…五十七の彫像』の扉に用いられた。ロダンはルノワールを画家として高く評価し、その油彩画を自ら購入している。

（上席学芸員 南美幸）

No.
130
2018年度 | 夏 |

安野光雅さんの故郷ふるさとについて思うこと

館長 木下直之

安野光雅さんの故郷、島根県津和

野町に安野光雅美術館が誕生（二〇

〇一年）したころ、私もこの町に足

繁く通っていました。安野さんは大

正十五年（一九二六）のお生まれ、『絵

のある自伝』（文春文庫）や『いず

れの日にか国に帰らん』（山川出版

社）の中で繰り返し語られる少年時

代の思い出は「昭和の津和野」、私

が追いかけていたのは「明治の津和

野」、殿様の銅像や日清戦争の従軍

写真でした。

津和野は山々に囲まれた小さな城

下町です。その長閑な風景とは裏腹

の空襲に備えた灯火管制やバケツリ

レーなどの思い出話には、こんなと

ころにまで戦争が影を落としていた

のかと驚かされました。

もつとも、男たちは全国津々浦々

から兵隊にとられ、戦場へと送り出

されたのですから、町のひとびとが

みんなで千人針をつくって持たせ、

留守宅には「出征兵士の家」という

看板が掲げられたことなど、光ちゃん

（安野さんのニックネーム）にと

っては日常的な光景でした。

『いずれの日にか国に帰らん』は九

十二歳を迎えた安野さんの最新刊で

す。書名どおり、安野さんは少年の

日々へと帰り、故郷を駆け巡ってい

ます。冒頭に掲げられた津和野の絵

の説明は、こんな言葉で結ばれます。

「だれも、戦争がいけない事によ

におもうものはなかったのでしょ

う。ほんとうは戦争さえなければ、

悲しいこともなかったのです。ここ

に描いたのは、昭和の初めころの、

貧しいけど平和なころを思い出して

描いたものです。」

戦争の影ということであれば、津

和野は長州と広島というふたつの大

藩にはさまれた小藩ゆえに、幕末の

動乱に翻弄されました。慶応二年（一

八六六）、第二次長州征討の際、津

和野を戦火から守ったのが藩主亀井

茲監これみでした。野坂峠に陣取った長州

軍が砲火を放てば、城下は「空襲」

されたも同然だったのです。

茲監は新政府にも積極的に関与し

ます。戊辰戦争が始まった直後から

参与となり、さらに宗教政策を司る

神祇事務局判事じんぎ（のち神祇官副知事）

となりました。旧藩時代より茲監を

支え、さらに新政府の宗教行政をリ

ードしたのが側近の福羽美静よしずです。

実は、安野さんも『絵のある自伝』

の中で、このふたりの名前を挙げて

います。郷里の大先輩ではあるが、

ともに「神祇官で廃仏毀釈の運動を

進めた代表といっている人物」であ

るから残念だと、評価はあまり芳しくありません。逆に、「津和野に鷗外おうがいがいることは、津和野の誇りである」（『いずれの日にか国に帰らん』）と森鷗外を高く評価しています。

鷗外といえ、親友賀古かこ鶴所つるどころに「石

見人森林太郎トシテ死セント欲ス

と遺言し、墓石には「森林太郎墓」

としか刻ませなかつたことはよく知

られています（余談ですが、賀古は

浜松の生まれ）。墓は東京三鷹禅林

寺にあり、昭和二十八年（一九五三）

に津和野永明寺ようめいじにも分骨されました。「石見人」という言葉には、ま

さしく「いずれの日にか国に帰らん」

という思いがこめられています。

林太郎少年の津和野を知ろうとす

るなら、『キタ・セクスアリス』がお

薦めです。六つの少年が四十ばかり

の後家さんから絵本を見せられ、か

らかわれる場面は何度読んでも微笑

ましい。津和野は本当に小さな町で

すから、鷗外と安野さん、いや林太

郎と光ちゃんの生家は目と鼻の先、

時を超えて、ふたりの駆け巡ってい

る姿が目に見えようです。

る姿が目に見えようです。

改修工事・一新された展示ケース照明に 関する工夫

Studio REGALO 尾崎文雄

美術館の建築を考える時、一つの前提条件がいつも頭の中にあります。

それは、どんな場面でも作品が中心だということ。作品は最大限の敬意をもって扱われます。展示によって公開される作品を、良い状態で次の世代に引き継ぎ、末長く保ち続けることを使命の一つとしているのです。作品は私たちの立つ位置を教え、私たちを映し出す、切実な文化的共有財産だからなのです。

このような考え方で静岡県立美術館の改修プロジェクトに参加しました。

今回の改修工事は、温湿度環境など作品の保存環境を向上させること、展示ケースの照明環境を向上させること、この二つが大きな柱となりました。特に展示ケースの照明環境については、最新鋭のLED照明設備によって全面的に一新されることが特筆できます。

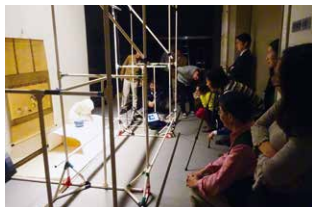
展示ケースの照明設備にとつてまず必要なことは、演色性と呼ばれる作品の持つ色合いの再現性に優れていることです。これが実現できていなければ、作品の真の姿を伝えることができなくなってしまうのです。次に様々な作品の異なる展示位置で、良好な照明環境を作りだせることが必要です。ケースの壁面に展示さ

れる絵画作品には壁面の明るさの均一性が求められます。作品のどの部分でも明るく同じ条件で観ることができ

ます。一方、立体的で小さな工芸品では、作品の周囲が最も観やすく他の部分には余分な光がない方が好ましい環境と言えます。ケース上部の大きな壁面が無駄に照らされていけば、目が眩んでしまい工芸品の細かなところが見えにくくなってしまふのです。感動とともに作品を紹介できる舞台装置としての機能も必要です。上下方向にわたる光のグラデーション（明るさ度合いの階調）を整えることができること、作品をこれまでにない印象深い雰囲気の中で展示することができ、さらに色温度（光の暖かみの度合い）の調整ができれば、作品に最もふさわしい光環境を実現することができます。場合によっては、スポットライトを追加す

ることで作品の特徴を引き立たせることもできると理想的です。

これらの理想的な照明環境の実現のために、設計の前段階で簡易照明実験を実施して、複数の最新照明器具の中から最も優れているものを選び、設計仕様として定めるところから始めることができました。ケース断面の設計検討に際しては、棒状のLED照明器具を複数列設置し、これらを調整することで作品に応じて異なる光環境を実現出来るようにしました。また、一つの器具の中には二つの色温度のLED発光素子を組み込み、出力割合を変化させることで色温度を調整できるようなっています。いずれも蛍光灯の時代にはできなかった最新技術の集合体です。さらにスポットライトも使いやすいものを開発し、取り付けレールを再整備することにしました。



器具を選定する簡易照明実験



展示ケース実物大模型モックアップ



モックアップによる照明検証



モックアップ上部の様子

様々な照明環境をケースの狭い空間の中で実現するのは、実はとても難しいことで、机上の設計図だけで容易に出来るものではありません。もう一つの特色ある工事段階での取り組みを最後にお伝えしたいと思います。展示ケースの実物大模型をガラスなしの簡易な姿で作成し、様々な検証のための場を設けたことです。モックアップ検証と呼ぶ過程です。内装は採用候補のクロスで仕上げ、照明器具を実際に取り付け、器具の位置や調整方法、仕上りの状況を関係者全員が集まって確認と検討を幾度もしました。この検証によって判明した細かな工夫を、すべて施工の現場に反映させることができたのです。

以上のことは今回の改修工事のごく一部の紹介ですが、立場の異なる関係者が一致協力し、全て作品を中心に進められたことが大きな成果を結ぶのではないかと考えています。

美術館建築の本来あるべき姿への改修を経た静岡県立美術館、プロジェクトに関係してきた者の一人として、今後の活動に大いに期待をしております。

尾崎文雄（おさきふみむ）氏

Studio REGALO 主宰。美術館や博物館の展示デザイン、改修工事、リニューアルなどに二十年以上の実績を持つ。関わった主な館園は、サントリー美術館、山種美術館、三重県立美術館、板橋区立美術館など。静岡県立美術館の改修工事には、アドヴァイザーとしてご参加下さいました。

「安野光雅の ふしぎな絵本展」

2018年7月14日(土)～9月2日(日)

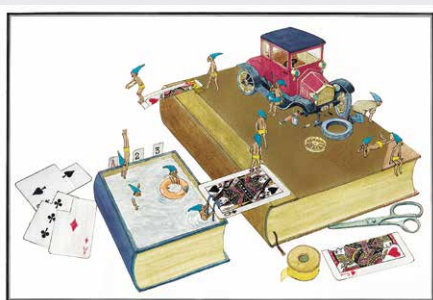
と、少女はいぶかしがりました。その後先生は学校を辞めましたが、少女の家にはやってきました。そしてある晩、「大きな茶色の包みを抱えて来られ」ます。包みから取り出されたもの——それは、絵本『ふしぎなえ』の原画。少女が見たのは、今日世界的に知られる絵本作家、安野光雅の「ふしぎ」な絵本世界が生まれる瞬間でした。

これは、絵本作家の小風さちの回想です¹。児童書の編集者で、福音館書店の社長も務めた彼女の父、松居直は、子供たちが教え子だった縁で安野の知遇を得ました。「絵はことば」と考えていた松居。彼と組み、安野が初めて世に送ったのが、当時は世界的にも珍しかった文字の無い絵本『ふしぎなえ』（一九六八年）でした。こうして「ふしぎ」の世界の扉を開いた安野は、その後次々と「手品師」のように「ふしぎな絵本」を生み出します。本展では、この安野光雅の不思議な絵本世界を、津和野町立安野光雅美術館所蔵の原画によりご紹介します。

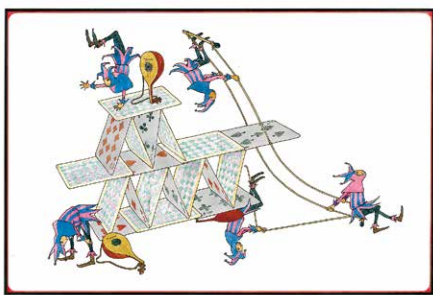
「だまし絵」で知られる画家、エッシャーに触発された『ふしぎなえ』

は、あがってもあがっても一階のままの階段や途中で天地が逆転してしまふ迷路など、文字通り「ふしぎなえ」でいっぱいです。これに加え第一章「ふしぎなせかい」では、『さかさま』（一九六九年）、『ふしぎなさーかす』（一九七一年）、『もりのえほん』（一九七七年）、『空想工房の絵本』（二〇一四年）といった、遊び心満載の安野の「ふしぎなせかい」を満喫します。続く第二章は「文字をたのしむ」。言葉絵を絵で翻訳する難しさを味わったという『ABCの本』（一九七四年）と、その経験を活かしたという『あいうえおの本』（一九七六年）の原画は、文字という記号を通じて想像をめぐらす楽しさを伝えてくれることでしょう。

第三章「科学のおはなし」は、『天動説の絵本』（一九七九年）の章です。古文書のような風合いの原画からは、科学の展開とともに変わ



「ふしぎなえ」1968年



「さかさま」1969年

いずれも津和野町立安野光雅美術館蔵
©空想工房

りゆく人や世界に向けられた安野の優しい眼差しさえも感じられます。最後の第四章「数字とあそぼう」（一九七五年）を紹介します。初めて数に出会う子どもたちのために描かれた作品は、「数字」の誘う「ふしぎ」の世界を私たちに垣間見せてくれるでしょう。

さあ、今年の夏は、安野光雅が描く「ふしぎ」の世界に出かけてみましょうか？

（学芸課長 三谷理華）

¹ 小風さち「絵本の小路から 不思議な先生——『ふしぎなえ』安野光雅 絵」インターネット「ふくふく本棚」二〇一七年五月二十九日掲載記事…
<http://www.fukukunpan.co.jp/blog/detail/?id=4>

幕末狩野派展

2018年9月11日(火)
～10月28日(日)

今年には明治維新から一五〇年という節目の年に当たり、各地で明治一五〇年のイベントが開催されています。この秋、当館では明治維新を境に日本絵画史が大きく転換する時代の状況に注目し、幕末に活躍した狩野派の絵師たちに焦点を当てる「幕末狩野派展」を開催します。

十九世紀半ば、徳川幕府が築いた平和な時代は終焉を迎え、激動期を生きた人々は、その困難に立ち向かい、新しい時代を切り拓きました。江戸時代を通じて画壇の中心にいた狩野派もまた、幕末という時代に大きく変貌を遂げ、最後の煌めきを放ちました。現代において、「幕末の江戸画壇」と聞いて人々がまず思い浮かべるのは、渡辺崋山や鈴木其一、或いは歌川広重などの絵かもしれません。



図1

かしながら、当時の江戸画壇を牽引していたのは、狩野派の絵師・狩野栄信、養信でした。そして、近代の日本画の礎を築いた狩野芳崖、橋本雅邦は、栄信・養信を輩出した木挽町狩野家の絵師として画業をスタートしています。幕末から明治へ、日本絵画史における大きな転換がいかにして行われたのかを考察するうえでは、栄信、養信の存在を無視することはできません。

十九世紀の江戸狩野派の研究に比べると、近年、京都で活躍した狩野派系統の絵師たちの研究は進んでいます。とりわけ、《富士山登龍図》(図1)のような、幕末の絵画史を象徴する作品と言って良い傑作を生み出した狩野永岳のすば抜けた画力が注目され、その評価は高まっています。

本展では、画壇の中心で活躍した栄信、養信の画業に焦点を当て、傍流の個性派、実力派の作品とともに

紹介することで、幕末狩野派の旺盛な活動の実態に迫ります。さらには、芳崖、雅邦へと続く日本絵画史の展開を、栄信、養信らの作品から捉えることで、幕末狩野派作品の重要性に光を当てます。

ここで、本展の見どころを二つ、ご案内したいと思います。一つめは、幕末狩野派の絵画様式を完成させた栄信、養信の代表作や革新的な作品が数多く展示される点です(図2)。とりわけ、これまで個展の開かれていない栄信の作品をまとめてご紹介する初めての機会となります。



図2

二つめは、幕末狩野派の絵師の中ではダントツの人気を誇る、狩野一信の畢生の大作・「五百羅漢図」(図3)が会場を彩る点です。近年、一信の個性的な画風は注目を集めています。狩野派の中心にいた栄信、養信の作品とともに一信作品を並べるこ

とで、幕末狩野派の個性はどこから生み出されたのか、その創造のルーツをたどります。

当館では「狩野派の世界」展と題し、定期的に狩野派の展覧会を開催していますが、本展は、約十年ぶりの「狩野派の世界」展となります。幕末狩野派の有名な大作・傑作以外にも、新出作品や初公開作品が多数展示される点もお見逃しなく。狩野派ファン待望の展覧会となること間違いなしです。

日本絵画史上まれにみる活躍を見せ、四〇〇年にわたり画壇の中心にいた狩野派の絵師たちは、その終焉期、何を、どのように描いたのか。幕末狩野派の典雅で美しく、豊麗な世界をぜひ、会場でご堪能ください。

(上席学芸員 野田麻美)



図3

キャプション

図1 狩野永岳《富士山登龍図》(静岡県立美術館)

図2 狩野養信《角田川真景図》(部分) (東京国立博物館)

Image: [NMI Image Archives]

図3 狩野一信《五百羅漢図 第22幅》(増上寺)

新潟調査から

上席学芸員 村上 敬

筆者は現在、「めがねと旅する美術」展七月二〇日に青森県立美術館にて開幕、その後島根県立石見美術館を経て、当館の会期は十一月二三日から一月二七日まで）の開幕準備に取り組んでいる。同展は「めがね」をキーワードとし、美術とその周辺における「視覚」の役割を再考しようという展覧会である（めがねが並ぶ展覧会というわけではない）。

これまで各地で行われた同種の展覧会を振り返ると、日本における江戸後期から明治時代にかけての「視覚（の革新）」というテーマであれば、神戸市立博物館がはや

くも一九八〇年代から行っていた館蔵「眼鏡絵」関連展示や、「のぞいてびっくり江戸絵画——科学の眼、視覚のふしぎ」展（二〇一四年、サントリ美術館）、「浮世絵から写真へ——視覚の文明開化」展（二〇一五年、東京都江戸東京博物館）などといった優れた展示が開催されている。また、西洋近代の事情にも目を向けたものとしては「イマジネーション——視覚と知覚を超える旅」展（二〇〇八年、東京都写真美術館）などの例がある。

これに屋上屋を架すとすればそれにふさわしい新機軸がなければならぬ。本展覧会ではこれを現代の科学技術やアートに求め、対象を現代に近づけつつ、より横断的な視点から観察することをめざした。実は本展、当館でかつて行われた「ロボットと美術」展（二〇一〇年）「美少女の美術史」展（二〇一四年）のメンバーによる企画であり、そのテイストにやや近い——ただし今回はモチーフの特性からいわゆるサブカルチャー的表現はやや控えめになる——も考えていただければイメージは共有できるだろうか。

この展覧会の詳細については静岡展開幕が近づく次号以降に譲るとして、今回は、その調査段階で訪れた新潟市の「のぞきからくり」屋台調査について紹介することで文責を果たしたいと思う。先まわりして申し上げますれば実は今回の展覧会にのぞきからくりは出品されない。主に輸送経費・資料



図版1：新潟市巻郷土資料館に保存されているのぞきからくり屋台



図版2：「押絵」拡大図

保全などの問題で断念せざるを得なかった。しかし、日本が近世から近代へと移り変わる時期における視聴覚イベントの一つとしてなかなか重要な存在ではないかと考え、ここで補足的に紹介する次第である。

二〇一七年五月一六日、筆者は新潟市へと向かった。新潟市の巻駅（ここはかつて新潟県巻町であったが、合併によって現在は新潟市西蒲区となっている）から徒歩で新潟市巻郷土資料館へ移動。同館に所蔵されているのぞきからくりの屋台およびナカネタ（戦前まで使用されていた現物）を拝見した。さて、そもそものぞきからくりとはなにか——。

近代ののぞきからくりは浅草を初めとする全国の盛り場や緑日に幕末頃から昭和戦前期にかけて出現した見世物である（静岡市でもこの見世物は出ていた）。凸レンズをはじめんだのぞき窓を備えた屋台【図版1】を組み、そのなかに照明（ガスやオイ

ルランプ、電灯が用いられたという）と押絵（お正月の押絵羽子板のように、和洋折衷的な画風の絵画に綿と布を用いて立体感を加えたもの）【図版2】を仕込む。のぞきからくりの押絵はとくに「ナカネタ」と呼ばれ、ほとんどの場合線遠近法を強調したいわゆる「浮絵」の構図になっている【図版3】。これをのぞき窓からレンズ越しに覗くと立体的に見えるという仕掛けである。ナカネタは一話につき七枚ほど用意され、紐を用いたからくりによって場面転換、この絵の内容を一〜二名の演者が節を付けて語るといったスタイルの見世物である。演目は明治時代らしく、鉄道や警官、裁判といった近代的モチーフが加わりつつ、因縁話（いわゆる「親の因果が子にたたる」式のもの）や悲恋もの（例えば「八百屋お七」、仏教的説話（「地獄極楽」など）のような前近代の雰囲気を感じたものがベースとなっており、さながら江戸と明治の混交とい

った趣を呈している。実地の上演では、遠巻きに聞くだけなら自由だが、語りには誘われてのぞき窓から絵を覗くと料金が発生するという商売となる。

演者の語り（節）もたいへん興味深い。七五調の節が延々と続くもので、遠く淵源を遡れば地獄極楽の絵解きをしながら遊行した熊野比丘尼につらなるというから演芸史の上でも貴重なものである【註1】。

煎じ詰めれば浮絵を凸レンズで眺めるだけというきわめて簡素な見世物、現代の3Dとはだいぶ異なるが、覗いてみるとたしかに立体感が感じられ、面白い【図版4】。これに念仏のようなBGMが加わるとなれば、一種異様な視聴覚体験となったであろう。

さて、さきほど筆者は「近代の」のぞきからくりは幕末から、と申し上げた。実は江戸時代にもものぞきからくりは存在しており、すでに諸家の指摘するところとなつて



図版3：「ナカネタ」の1枚



図版4：レンズから覗いたところ（ただし印刷では両眼視になるので立体感を感じられない）



図版5：無款《江戸風俗図鑑 浅草の巻》享保5-6（1720-21）年

いる【図版5】。図版5のようなタイプのものぞきからくりは近松門左衛門の浄瑠璃『冥途の飛脚』（一七一）にも登場する【註2】ように、おそらくは一七世紀末から存在している。これは浮絵ではなく立体的なカラクリを見せるものであったと考えられている。したがってそこにレンズは介在しない。「隠されたからくりをのぞきみる権利」が小銭で売られていたと考えてよい。これに、「浮絵」がくわわってくるのが一八世紀後半、平賀源内（一七二八～一七八〇）の時代、ということになる【註3】。そしてさらにこれに七五調の節が上乘せされるのが幕末【註4】というわけである。「めがねと旅する美術」展では、「現代の科学技術やアートに」対象を拡大する——と現代志向の雰囲気を見させながら、ここまで近世・近代端境期の芸能について説明してきた。しかしそのこころは「視覚テクノロジーと聴覚との交差」という点に

ある。なるほどたしかにのぞきからくりに用いられている技術は凸レンズと浮絵といった素朴なものではあるが、その時代なりの先進テクノロジーといつてよい。それに説教のような節談という土着的芸能がミックスされるというありようが興味深い。あたかもその後、無声映画の解説弁士が日本流の「活弁」として独自の進化を遂げたさまを思わせる。「視覚」について考えるのが美術館の本旨であるが、視覚だけを切り離して考えるのではなく、それが提供されてきた環境・システムといったことにもなるべく目を向けていきたいものである。

江戸川乱歩の短編「押絵と旅する男」（一九二九年）には、のぞきからくりがきわめて重要なモチーフとして現れてくる。「めがねと旅する美術」展ではこの小説をアニメ化した『押絵ト旅スル男』（塚原重義監督）が上映される。のぞきからくりの妖艶な雰囲気をつめた映像となる予定なのでぜひ期待されたい。

■註

- 註1…この語り（節）は小沢昭一「ドキュメント『日本の放浪芸』」小沢昭一が訪ねた道の芸・街の芸」ピクチャーエントテインメント（CD、二〇一五年）に収録されている。
- 註2…山本慶一「のぞきからくりと写し絵」南博・永井啓夫・小沢昭一編『えとく』白水社、一九八二年、五三頁。
- 註3…前掲書六二頁。
- 註4…加太こうじ「視覚の文化論」南博・永井啓夫・小沢昭一編『えとく』白水社、一九八二年、一五頁。



本の窓
京谷啓徳著
『凱旋門と活人画の風俗史』
『めきスペクタクルの力』
講談社選書メチエ 二〇一七年

「凱旋門」とは戦勝を祝す目的の建造物。「活人画」は画中の人物に扮して絵画を模してみせる余興の一つ。無関係に見えるこの二つは、実はイタリアのルネサンス期の君主入市式では、ともに支配者の栄光を寿ぐテンポラリーな仕掛けだったというお話から本書は始まります。歴史の流れの中でこれらは分化し、変質し、文明開化を経た日本に入ってくるや、凱旋門は「ハイカラ・モダン」を象徴する意匠となったり、「額縁ショー」にかたちを変えた活人画は「ストリップショーの元祖」と言われたり。その変質の周辺では、なんと、良く知られた文化人たちが暗躍していました。

本書は、そんなちよつとびつくりな文化史の一面を、資料に参照しながら丁寧にひも解いていきます。「高尚」や「低俗」の境目も、時代とともに移ろいゆく儂いものだと知らしめてくれるようです。

（学芸課長 三谷理華）

本館展示室の改修を終えて

総務課長 堀水里和

四月より赴任しました。美術館は二十五年ぶり、二度目になります。美術館へ向かう木々の緑は濃さを増し、プロムナードの彫刻、本館、ロダン館の佇まいも歴史を重ね風格が増したように感じます。木漏れ日を楽しみながら坂道を上り、職員通用口に着くと、裏山から届くホトトギスの鳴き声は昔のままで、心が和み清々しい気持ちで仕事に向かうことができます。当時を思い起こすと、ルーアン、フィラデルフィア、

エルミタージュ、ホノルル美術館等の巡回展、楠木清方、ムンク、秋野不矩、ロダン等の展覧会で観覧者数が伸びたこと、天皇皇后両陛下がオープン直後のロダン館に行幸されたことが印象深く残っています。建



一階 名品コーナー改修中の様子

物は変わりませんが、学芸課の顔ぶれはすっかり変わり、エデュケーショナルスタッフが加わっています。学芸員の専門性を生かした美術講座、フロアレクチャーの他、学校に向かう出張美術講座、社会とアートをつなぐ活動、園児・児童・生徒を対象とした教育普及活動にも力を入れており、美術館のあり方やニーズが変わったのだと感じています。

今年度末には草薙駅南北駅前広場が改修を終え、南口（県大・美術館口）の景観が大きく変わると静岡市の担当者から伺いました。美術館の駅前広報パネルも新しくなる予定です。草薙駅を往来する学生の数が増え、新しい流れが生まれる事でしょう。

美術館も、本館は築三十年を超え、設備機能維持のための修繕が必要な時期を迎えています。収蔵庫・図書室の容量不足も懸案です。三月から六月末まで実施した本館改修工事では、施工業者、関連業者、アドバイザー、県の担当者、本館職員、関係者が毎週綿密な打ち合わせを重ねました。四半世紀を超えて美術館の改修に携われるのも何かの縁、「つながる、次へ」の美術館を目指して尽力したいと思います。

美術館ホームページがスマホ対応になりました。twitter、facebook、Instagramにもぜひアクセスしてください。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)
7月1日(日)～7月13日(金)
夜間開館：8月4日(土)、11日(土・祝)、18日(土)、25日(土)
10:00～19:00(展示室への入室は18:30まで)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737
ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

展覧会年間スケジュール

<企画展>

安野光雅のふしぎな絵本展
7月14日(土)～9月2日(日)

幕末狩野派展

9月11日(火)～10月28日(日)

めがねと旅する美術展－視覚文化の探究－

11月23日(金・祝)～2019年1月27日(日)

1968年 激動の時代の芸術

2019年2月10日(日)～2019年3月24日(日)

<収蔵品展>

新収蔵品展

7月14日(土)～9月2日(日)

日本画の情景－幕末から近代へ

9月4日(火)～10月14日(日)

不思議なアート

10月16日(火)～12月2日(日)

美術の時間 現代アートにおける時間の表現

12月4日(火)～2019年2月3日(日)

日本の自然－富士山、日本の山、川、海－

2019年2月5日(火)～2019年3月31日(日)

友の会のご案内

入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。